

人間となるための学び

学校長 太田 清史

先の本校の公開講座「今熊野セミナー」には、大谷大学から気鋭の新任講師、赤澤清孝先生をお招きして「変わる大学教育」をテーマにお話をいただきました。その中で赤澤先生は、国連ユネスコの「二十一世紀教育への提言」を紹介され、

- ① 知るための学び Learning to know
- ② 為すための学び Learning to do
- ③ 他者と共に生きるための学び Learning to live <with others>
- ④ 人間となるための学び Learning to be

の四つの学びを挙げて、「二十一世紀の教育にとって重要さを増すのは、『自己実現』と『共生』のための学びであるとの期待を示したものである」と指摘されました。

翻ひらがえつて本校の学びを考えてみ

ると、学校スローガン「To Be Human(人となる)」が示すとおり、そこには人間成就としての「自己実現」が謳うたわれています。知識や技術の修得を基にした、共生と自己実現の道が、本校では二十世紀から、いや創立以来の「樹心」の精神において、方向付けられていたことがわかります。

先人の英知が、いつでもどこで

も誰にでも通じる普遍的な人間観となつて、本校の教育を下支えして下さっていることに、改めて感謝と敬意を奉げるものです。

赤澤先生はまた、「学びのピラミッド」を紹介されて、「授業で学んだ内容を、どれだけ半年後記憶しているか？」にもっとも有効な方法は、「他の人に教える」ことであるというデータを示されました。「読書」や「講義」を通じた学習がせいぜい一〇%程度の記憶しか残さないのに対して、「他の人に教える」ことで九〇%以上の記憶が残り、最も効果的な学習法であるというのです。

本校のあちこちに設置されている自習コーナーでは、生徒同士の教え合いの光景がよく見られ、学校説明会でもスライドで紹介したくらいです。

もっとも効果的な学習形態が、自然発生的に行われていることに、驚嘆した次第です。